

飛鳥藤原第107次調査(朝堂院東第一堂・回廊の調査) 現地説明会資料

2000年9月9日

奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1 はじめに

今回の調査地は、藤原宮(694~710年)の中心部分に近い朝堂院地区の一部で、大極殿院の東南にあります。飛鳥藤原宮跡発掘調査部では昨年の100次調査から朝堂院周辺での継続的な調査を行うことを計画し、日本最古の本格的な都城である藤原宮の中核部の様相を明らかにしようとしています。この場所では、1939年(昭和14)~40年にかけて日本古文化研究所が部分的な調査を行い、朝堂院東第一堂、および朝堂院北面回廊と東面回廊を検出しました。その結果、東第一堂は桁行9間、梁間4間で、柱位置の方眼の交点全てに柱を建てる総柱の礎石建物であると復原されています。しかし、古文化研究所の調査は柱位置のみを掘るものであったため、基壇外装や雨落溝など、建物の詳細についてはわかっていません。また、その後平城宮、長岡宮、難波宮などの諸宮で朝堂院の建物の調査が進展するにつれ、各宮の朝堂に総柱建物は見られないことが判明し、その機能や発展の継続性を考える上で藤原宮のみが特殊な位置付けとなり、議論の対象になっています。

今回は、そうした研究上の疑問を再発掘によって解決するために、面的に広い範囲を調査することとし、それによってなお新たな知見を得ることを目的としました。調査は昨年の第100次調査区と一部重複する形で、東西57m、南北54mの約3000㎡の発掘区を設定して4月上旬に開始し、現在なお継続中です。

2 主な遺構

検出した遺構は、大きくは①古墳時代、②飛鳥時代、③藤原宮直前期、④藤原宮期、⑤奈良時代以降の5つの時期に区分できます。ここでは、③~⑤について報告します。この時期の主な遺構として、朝堂院の東第一堂と回廊、内裏外郭南辺の掘立柱塼、宮に先行する条坊道路の側溝、奈良時代の溝、平安末~鎌倉時代の集落などがあります。

【藤原宮期の遺構】

東第一堂：発掘区の西南部にある礎石建ち南北棟建物で、建物の北半部を検出した。古文化研究所の調査では、桁行9間、梁間4間(7間四面)の建物であることがわかっています。諸宮との比較では、平城宮以降の東第一堂に

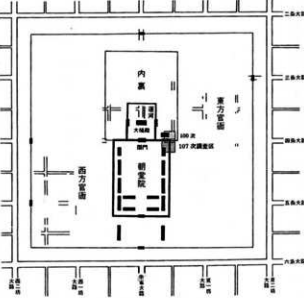


図1 周辺位置図

比べ、規模が大きくなっています(図5)。東第一堂は平安宮と呼ばれ、太政大臣と左・右大臣の入るところで、儀式の場における臣下の最上位の建物といえます(図4)。

今回の調査では礎石位置を22ヶ所確認し、礎石も8個見られますが、いずれも原位置から動かされています。柱間は身舎の桁行・梁間ともに4.2m(14尺)、廂の出は3m(10尺)で、全長は南北方向が35.4m、東西が14.4mになります。礎石据え付け掘形は東西約2m、南北約1.5mで、まず栗石を入れながらつぎ固めて基壇土を盛り、その後礎石位置を掘り下げて根石を入れ、その上に礎石を据えています。礎石はいずれも大ぶりの花崗岩で、造り出しなどはありません。今回の調査により、古文化研究所の調査では身舎の横通りにある基壇土中の栗石を礎石の根石と誤認したものであり、そこには礎石据付掘形がないことがわかりました。つまり、総柱建物ではないことが判明し、他の諸宮の朝堂と同様の構造であることがわかったことは大きな成果です。東端と北端の柱位置から約2m外側には、基壇端の石を据えるためと考えられる溝があり、一部に凝灰岩の粉末が残ることから、基壇外装は凝灰岩を用いたようです。この溝は北側では西から2間目、東側では北から2間目と5間目で外側に約2.6m突出し、ここに階段がありました。全体では北面と南面に1ヶ所ずつ、東・西面は3ヶ所ずつ階段が付くと考えられます。雨落溝は見られませんでした。また、基壇上では建設時および解体時のものと考えられる足場穴が見つかりました。

東第一堂の南北の中心から北面回廊の中心までの距離は29.6m(100尺)となり、東側柱と東面回廊の中心との距離は18m(60尺)です。

朝堂院回廊：発掘区の北半と中央部で検出した礎石建ちの複廊で、北面回廊を東西方向に9間分、直角に南に折れる東面回廊を12間分確認しました。両回廊とも柱間は桁行4.2m(14尺)、梁間3m(10尺)で、隅部の2間分は桁行・梁間とも3m(10尺)です。礎石は北面回廊で7個、東面回廊で2個、隅部分に2個残りますが、原位置にあるのは7個のみです。それ以外の礎石は落とし込まれているか、もしくは抜き取られています。礎石は花崗岩で、上面を平滑に加工していますが、造り出しなどは見られません。

朝堂院回廊の規模は東西約230m、南北約320mと復原されていたが、100次調査によって、東西幅は235mと判明しています。回廊は藤原宮造営に伴う整地土の上であり、回廊本体の基壇については東面回廊部分に比較的良く残っています。回廊に囲まれた内部は、外側より一段高くなっています。側柱位置から約2m外側には内外の雨落溝を検出しました。内側雨落溝、外側雨落溝ともに幅約1mで、溝の埋土上面に瓦片が大量に落下しています。東面回廊の外側雨落溝のみ比較的深く、真っ直ぐ北上して発掘区外へ伸びていることから、回廊内外の水を集めて北へ流す排水路を兼ねていたのでしょう。この東雨落溝の西側から玉石の採取跡が見つかり、回廊は外側については玉石積の基壇外装をしていたことがわかりました。また、回廊の建設時と解体時の足場穴が見つかりました。

東西溝1：第一堂の北約3mにある溝。幅約70cm、深さ約40cmで、底に砂をつめ、上部を礫で覆う暗渠です。第一堂から落ちた雨水を流す排水溝でしょう。東へのびて東面回廊の西雨落溝にぶつかり、回廊の下を暗渠で抜け、東雨落溝に合流するようです。

【藤原宮直前期の遺構】

藤原宮の直前期と見られる遺構として、4条の溝があります。

東西溝2・南北溝3：発掘区北半部北面回廊南雨落溝の下には、より古い時代の溝、東西溝2があります。これは100次調査ですで見つけています。調査区東半では、この溝に接続して南へのびる南北溝3がありますが、整地土がその上にあることなどにより、全体は見えていません。東西溝2は溝幅約1mで深さは約80cm、南北溝3は北方では幅1m、深さ50cmですが、調査区南端で一部確認した所では、幅が1.7mあります。

東西溝4：東西溝2の北を流れる溝で、100次調査の成果では、この溝の方が古くなります。幅1.5～1.8m、深さは40～60cmありますが、含まれる遺物は少なく、土器と瓦片が若干出土するのみです。

東西溝5：整地土に覆われているため一部での検出ですが、幅約6mで、1m以上の深さの大規模な溝です。大極殿北方および北面中門の調査で検出した、宮を造営する時に資材を運んだ運河とみられる溝と一連のものである可能性が高く、今後の調査が期待されます。

このうち東西溝2と南北溝3は、その位置関係、および、周辺の成果を考え合わせると、藤原宮造営に先立つ条坊道路の側溝と判断できます。岸俊男が復原した藤原京の呼称でいえば、南北溝3が東一坊々間路の西側溝で、東西溝2は四条大路の南側溝にあたります。東一坊々間路の東側溝は整地土の下にあるため、今はまだ見えていません。100次調査の結果によれば、東一坊々間路の幅は溝心々間で7m(20大尺)、四条大路は同じく14m(40大尺)となります(図3)。

また、東西溝4はそれらよりさらに古い道路の側溝となることがわかっています。今回の調査では、東一坊々間路の古い方の溝は、整地土の下に隠れているため、まだ手がかりはつかめていません。

【奈良時代以降の遺構】

東西溝6・7：調査区南西端で検出した2条の平行する溝です。埋土から瓦をはじめ、奈良時代後半の土器のほか、土馬が出土しました。

建物1・2：調査区東北部にある東西に並ぶ東西棟掘立柱建物。柱間は、いずれも桁行は2.7m(9尺)、梁間は1.65m(5.5尺)です。建物1は桁行3間、梁間2間、建物2は桁行4間以上で西から2間目に間仕切りがあり、調査区外へのびています。時期は不明ですが、建物1の西妻は東面回廊の東雨落溝が埋まった後に掘られており、柱穴の埋土の状況から、奈良時代の可能性があります。

建物3：東面回廊の東にある3間×2間の掘立柱南北棟。平安～鎌倉時代のものでしょうか。

建物4～6：調査区東南部にある掘立柱建物。いずれも小規模なもので、方位は東で南にふれています。これまでの調査の例からすると、平安時代のものかも知れません。

建物7～14：調査区西半にある掘立柱建物群。いずれも12～13世紀のもので、1戸単位の住宅ですが、建て替えがあり、大きくA・Bの2時期に分けられます(図6)。A期は建物7・8・9があり、建物7が主屋です。B期は建物10が主屋で、その北に建物11・12が

東西に並立し、更に北に建物13があります。建物10と12の東妻、建物10と11・13の西妻はそれぞれ揃い、塀で結ぶという整然とした配置をとります。建物10は総柱で、同じ場所建て替えています。A・B期ともに宅地内に井戸状土坑17・18があり、そこから東へ向けてすぐ北折する溝8・9が流れています。B期には東面回廊の東にも南北溝10があり、回廊をはさんで梯子状の溝群を形成します。畑作あるいは園地にかかわるものでしょうが、どの様な機能のものであったか興味があります。また、井戸19もこの時期のもので、調査区北端には別の宅地の建物15・16の一部が見えます。

3 主な遺物

出土遺物は瓦と土器が殆どです。特に瓦の出土量が極めて多く、軒瓦に限っても現状で軒瓦瓦が316点、軒平瓦が263点を数えます。今回の調査では東第一堂に葺いていた軒瓦の組み合わせがわかりました。これは平群町安養寺瓦窯、大和郡山市西田中・内山瓦窯で焼いたもので、文様的には平城宮第一次朝堂院で使用した瓦に連なっていきます。他にも、回廊に葺いていた瓦も出土しました(図2)。土器は瓦に比較して量は少ないですが、藤原宮期の土器以外に、明確な遺構は検出していないものの、7世紀初頭の土器が出土しています。奈良時代後半の土器や土馬が出土したことは、廃都後の宮城の利用形態を考える上で注目されます。回廊東雨落溝からは檜皮片が出土し、周辺に檜皮葺の建物があったのかもしれない。

4 成果と今後の課題

①藤原宮期の遺構を再確認しました。従来の調査によって、存在が知られていた朝堂院東第一堂と回廊について面的に精査し、柱位置を正確に把握できたと共に、基壇外装は第一堂が凝灰岩、回廊の外装は玉石を用いていたという、細部の構造まで判明しました。これは、面的に発掘したことで知ることができた成果です。また、建設時と解体時の2時期にわたる多くの足場穴が見つかりました。

この中で、東第一堂が総柱建物でないことがわかったことが最も大きな成果です。これによって、日本最古の本格的な都城である藤原宮から以降の都城への朝堂院の変遷が、段階的・連続的にたどれるようになりました。

②藤原宮廃絶後の遺構を多く検出しました。奈良時代には、東西に並ぶ建物と溝があります。平安時代には多数の南北方向の溝と小規模な建物が見られ、この時点で宮跡地の利用形態は一変するのでしょうか。平安末～鎌倉時代には、集落の建物が整然と並んでいたことがわかりました。この集落は周辺にも広がるのが予想され、廃都後に施行された条里制との関係で、興味深いと言えます。

③今回の調査でも、藤原宮造営時の整地土の下にある多くの溝が見つかりました。まだ掘り下げてはいませんが、今後の調査によって、これらの溝がどのような性格のものであるか解明することが必要です。それとともに、藤原京・宮の造営にかかわる豊富な遺物が出土することが期待されます。

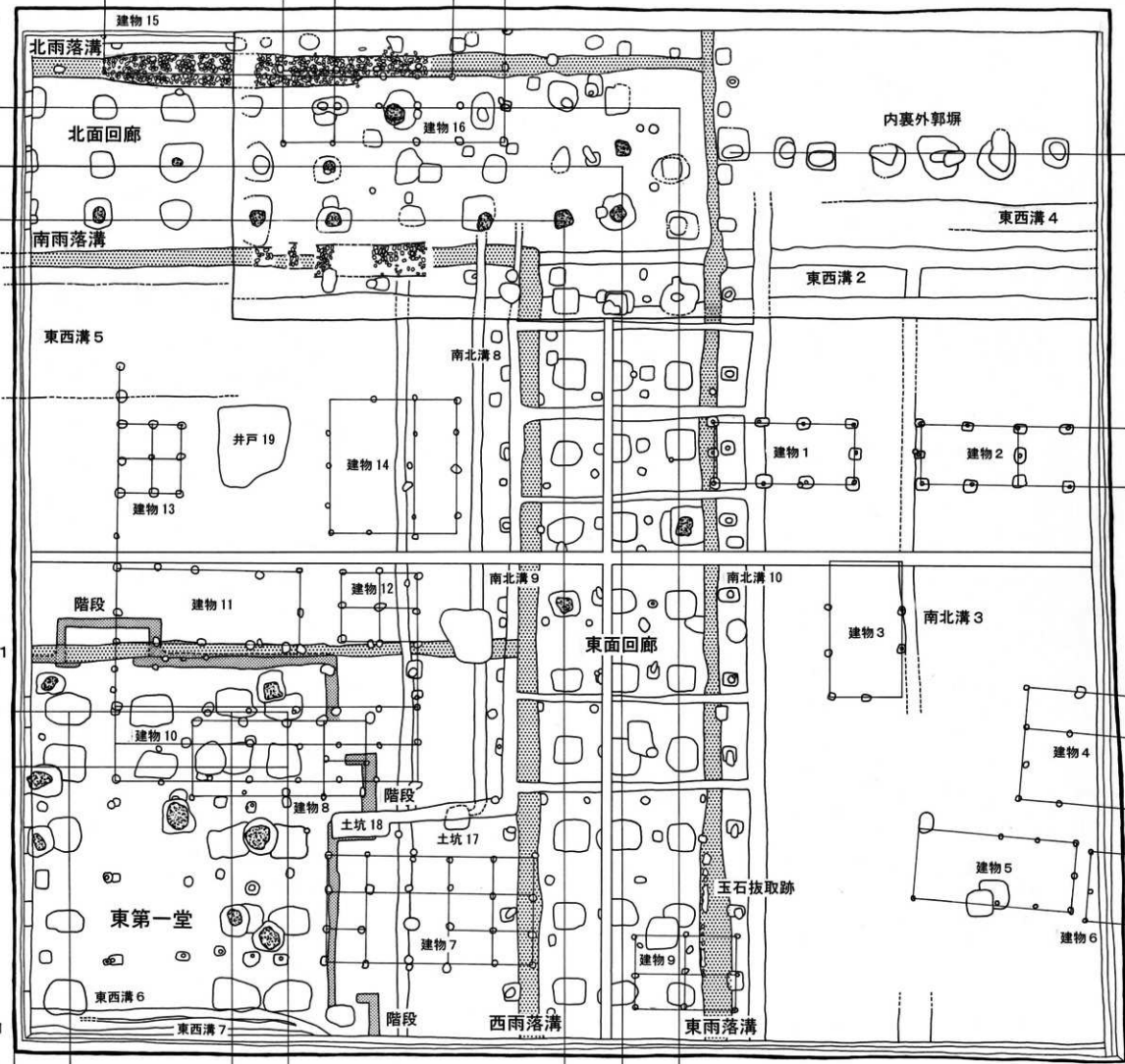
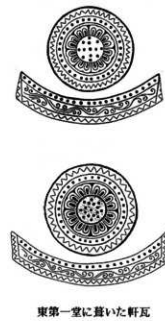
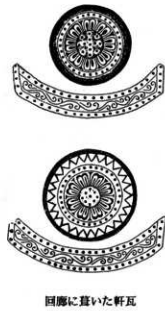


図2 第107次調査発掘遺構図

【藤原宮朝堂院関係史料】

- 698 文武2 1/1 天皇、大極殿に御して朝を受く。
 701 大宝1 1/16 皇親及び百寮を朝堂に宴す。
 701 大宝1 11/17 太政官処分すらく、(中略)例として罪人らを率いて朝庭に集む。
 704 慶雲1 1/25 始めて百官の跪伏の礼を停む。
 705 慶雲2 1/15 宴を文武百寮に朝堂に賜う。
 706 慶雲3 1/7 (新羅使)金備吉らを朝堂に饗して、諸方の楽を庭に奏へまつらしむ。
 707 慶雲4 12/27 詔して曰く(中略)往年に詔有りて跪伏の礼を停めき。
 709 和銅2 4/27 (新羅使)金信福らを朝堂に宴す。

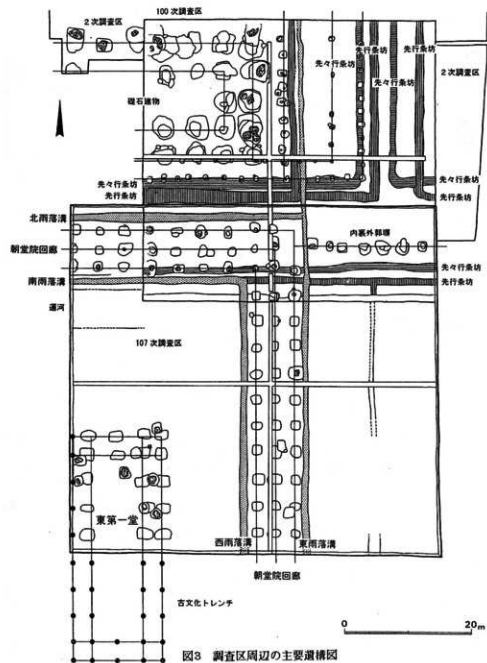


図3 調査区周辺の主要遺構図

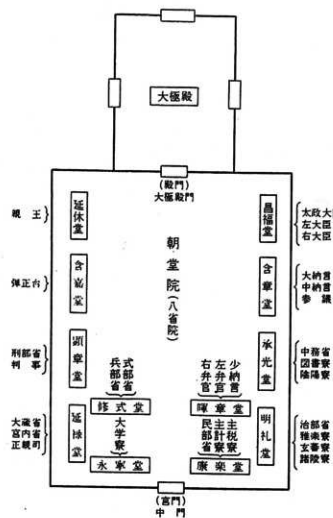


図4 平安宮朝堂院概念図

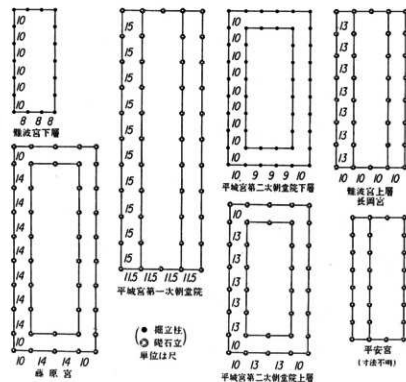


図5 朝堂院東第一堂規模比較図

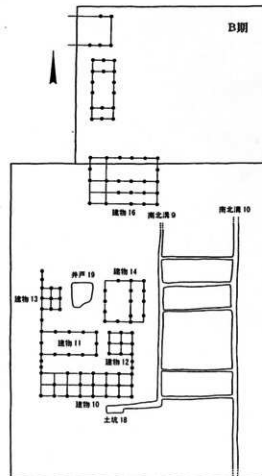
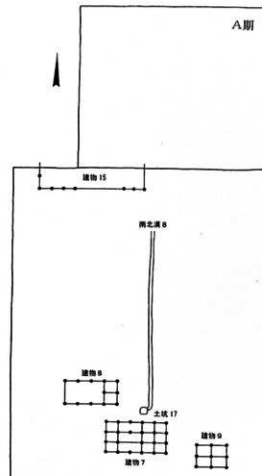


図6 平安末～鎌倉時代の遺構変遷図